

対談 「人」と「人」をつなぐ援助

国内外での 人材育成への課題とは

渡辺 利夫 拓殖大学学長

諏訪 龍 財団法人日本国際協力センター理事長

● 日本の「志」を世界に示す ODA

諏訪 日本の ODA は、「日本という国と国民を映し出す鏡」であり、日本の「志」を世界に示す場だと思えます。わが国は、1954 年のコロンボ・プラン加盟を原点として、世界に貢献してきました。まず、ODA50 年について、どう統括されますか。

渡辺 日本の ODA は、特に東アジアで大きな成果を挙げてきたと思います。たとえば、JICA「タイ・モンクット王工科大学」のプロジェクトにより、同大学は今やタイで最もレベルの高い大学のひとつとなって、多くの優秀な技術者や研究者を輩出するまでになりました。この例のように「人造り協力」が実を結んだケースは他

にもたくさんあります。援助の現場で、日本人と一緒に技術協力に関わった開発途上国の人々が抱く高い日本評価に驚かされたことが、私には何度もあります。

第二次世界大戦後、国際社会に復帰していく時代の日本人には高い志と熱い情熱がありました。戦争で迷惑をかけたアジアの人々のために何かをしなければならない、日本人の真面目さや技術に対する熱意をアジアの人々に理解してもらいたい、そういう熱意が強かったのではないのでしょうか。

しかし、そういう情熱や志が、日本が豊かになるとともに薄れていったのは皮肉なことです。1990 年代頃からは、ODA 大綱や ODA 中期政策の策定など体制が整った反面、国内経済の停滞もあって日本人の気持



ちが内向的になり、日本のODAにも迷いが出てきたように感じられます。2000年代に入ってから、冷戦終結から10年が経過して、民族や宗教、難民、テロリズムなど援助のテーマが複雑化し、中近東やアフリカなど、これまでの日本のODAに馴染みの薄い分野・地域に焦点が移っていきました。そんなことも日本人がODAに冷たくなってきた原因かもしれません。今こそ、私たちは、ODAの行くべき道を真剣に見据える必要があるのではないのでしょうか。

●「ODAは大きな学校です」

諏訪 もし日本がコロombo・プランに加盟せず、ODAも行っていなかったらどうなっていたのでしょうか？

渡辺 そういう問いかけが非常に重要ですよね。学生たちに「国家予算をODAよりも国内経済に優先させる現状をどう思うか？」と問いかけてみます。すると彼らは「ODAを行うことで初めて生まれる誇りや晴れがましき、これがあって初めて日本人は幸せになれるのではないのか。またODAの減額は国際的な信用の喪失につながるのではないか」というまっとうな答えが返ってきて、こちらが嬉しくなります。しかし、国民一般となるとそうはいかないのでしょうかね。

諏訪 「敗戦国の日本が国際貢献をする資格があるのか」と言われた時代の日本の「志」がその後大きく引き継がれ、特に、10年間ODAの供与額世界一だったという点で、日本にとっても数値では説明できない大事なものを得たのではないのでしょうか。

渡辺 アジアの国々で、日本に対してよい印象を持つ

人が90%までになったという最近の調査結果(読売新聞2006年9月)などは、日本のODAがかなり大きな要因となっていると思いますね。

諏訪 国内に目を転じると、1954年のコロombo・プラン加盟当時、それまで援助を受け入れる側だった日本は、経験もなく国内にODAを行うための基盤も整っていませんでした。この50年間ODAを行ってきたことによる、日本社会や日本人に与えた影響はとても大きいのではないのでしょうか。それを実証するため、JICEでは、本邦研修受入機関などを対象に調査を実施しました(*囲み補足参照)。その結果、研修員を受け入れたことによって地域の国際化が進展し、受け入れた組織や個人が「気づき」の機会や自信を与えられたとの回

「ODA事業の国内インパクト調査」

2004年度および2005年度の2回にわたり、JICEが実施。JICAが開発途上国から研修員を受け入れ日本国内で実施する研修(「本邦研修」)の受入機関などを対象に、“ODA事業は、日本人にとってどのような影響があったのか”を検証することを目的に行ったもの。

(事例1)財団法人結核予防会結核研究所

「外国からの研修員を受け入れることで日本社会を相対化して見ることができ、自らの業務をふりかえるきっかけになった。業務改善や部署間のコミュニケーションの向上、国内の受益者の方々へのサービス向上につながった」

(事例2)国立大学法人北海道教育大学

「教員が海外の教育現場で、教育の原点に気づかされた。海外プロジェクトへの取り組みという新しい課題を持つことで、大学としての一体感が生まれ、学内の雰囲気づくりにつながった。地元教育委員会との連携が生まれた」



答が多く寄せられました。国際協力の土壌がないところから、日本社会もODAに対する基盤を一からつくっていった、その足跡そのものが国内での土壌づくりになっていると思います。

渡辺 そうなのでしょうね。拓殖大学は、JICAの草の根技術協力の実施団体として、インドネシアの大学と連携し都市貧困層を対象としたコミュニティリーダーの育成に取り組んでいます。「大丈夫かなあ？」と思いながら送り出した学生が、開発途上国の現場できたえられ、インドネシア語を使ってコミュニティのなかに溶け込んで生き生き活躍している姿を見ると、「これが本当の教育なんだろうなあ」と実感させられます。

今の若者は、私たちの若い頃よりも「社会のために役に立つ、いいことをしたい」という気持ちが強いのではないかと思いますね。日本で大切に育てられて、これまで「他人のために何かいいことをする」ことがまっぴらにならなかった若者が、開発途上国の開発事業の現場で生まれて初めて自分以外の人々のために何かをしている自己を発見し確認する。そういう経験を通して、「公」に生きることの晴れがましさに気づくのでしょうか。今まで自分という「個」のためだけに生きていたけれど、「公」のために仕事をしたときの嬉しさはその何倍も大

きいことを体験を通じて彼らは理解するわけです。文字通りの「体得」ですね。

私は、ODAは日本人にとっての「大きな学校」だと思います。教室のなかではとても与えるようなことができない「現場」の教育の場ですね。私は学生たちに「この4年間で、君の人生が幸せになるような生き方を学んでほしい、そのためには現場で『公』の意識を体得することが不可欠だ」というメッセージをつねに出しています。ODAの現場は、日本人にとってのまぎれもない優れた「学校」ですね。「ODAの国民参加は、まわりまわって日本人を幸せにする」ための行動なのだというメッセージを、ODAの理念として出したいですね。

諏訪 ODAによって開発途上国の人々が幸せになることはもちろん、日本人にとっても「誇り」であり、「立派な日本人」になっていることを、もっと伝えていく必要があると思います。

渡辺 私もそう思います。

諏訪 緒方貞子JICA理事長のメッセージにあるように、「国際協力を日本の文化に」するということは、このようなことの積み重ねだと理解したいと思います。

● 現場でともに汗を流す「人造り協力」

諏訪 日本のODAの特長は、開発途上国の人々と「ともに考えともに行動する」ことにあると思うのですが、なぜ欧米諸国の方法と違うのでしょうか。

渡辺 1つには、日本人が持っている平等の観念に関係しているんじゃないかと思いますね。日本人には相手国の人々を自分と同質の人として考える人間観がある



わたなべ・としお

1939年山梨県生まれ。慶應義塾大学大学院博士課程修了、経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学国際開発学部学部長を歴任、2005年4月より現職。専攻は開発経済学、現代アジア経済論。東京工業大学名誉教授。ODA総合戦略会議議長代理。著書に『成長のアジア 停滞のアジア』（吉野作造賞）、『開発経済学』（大平正芳記念賞）、『西太平洋の時代』（アジア大賞大賞）、『神経症の時代』（開高健賞正賞）など。JICA功労賞、外務大臣表彰。

のではないのでしょうか。「努力すれば、相手国の人々も日本の技術を身に付けることができる」という自助努力の考え方が私どもの前提ですよ。現場で一緒に仕事をしながらOJTで技術移転を行うというのが日本のODAや企業でのいまなお一般的な方法だということも、このことに関係しているんじゃないかと思うんですよ。もう1つは、日本は世界銀行などのODAを受け入れ、自助努力で戦後復興を成功させたという経験がありますから、自助努力の大切さを骨身で知っているわけですね。ですからこの経験を海外に向けて発信する資格があると私は考えます。自助努力支援は、ODA理念のトッププライオリティとして日本人のなかに根づいているんじゃないかと思うんですよ。

諏訪 上野景文氏の著作『現代日本文明論』に、日本人の考え方の背景にはアニミズムの平等観があり、欧米人の一神教の考え方とは基本的に違う、とありました。しかも日本は西欧文明を受け入れつつ伝統的な精神文化も忘れずに共存させる柔軟性があることで近代化ができたといっています。

渡辺 そういう関連性もあるのかもしれませんがね。私が開発途上国の現場を視察していつも考えさせられておりますのは、援助の最前線の現場で現地の人々とともに汗を流して仕事をしてこそ、日本のODAの本当の良さが発揮されるのではないかということですね。

しかし、ODAを日本の最大の国際事業と考えるのであれば、国内の人材はまだ不足しています。開発協力に携わる人材を恒常的に生み出す教育システムを、国全体として整備していく必要があります。その教育を受けた人材がさまざまな社会経験を積んでODAに再

び関わるルートを多様につくっていくようなシステムづくりが肝要です。

諏訪 そのためにも、JICEが行っている留学生受入事業は大きな役割を果たしているのではないのでしょうか。開発途上国の学生が日本に学ぶ意義と同時に、日本人が大学あるいは地域社会において開発教育・国際協力を実感する意義もあります。留学生はまさに「生きた教材」であり、国内の人材育成のためにも、留学生を受け入れる意味があると思います。

渡辺 同感です。日本を中心にアジアの人的ネットワークを構築していくために、留学生の受入は重要だと思っています。1984年に提唱された「留学生受入10万人計画」は、すでに目標人数を突破しています。しかし、公的サポートをはじめ受入システムや大学の意識改革など、受け入れる日本側の体制にはまだまだ多くの検討

課題が残されています。目的意識をもって受け入れ、帰国させることが大切です。

● 日本らしいODAとは

諏訪 外交力の重要な資源にはODAがあるといわれますが、これからのODAの課題は何でしょうか。

渡辺 欧米のドナーのことはあまり気にし過ぎないで、日本独自の援助スタイルに自信を持つべきです。円借款を通じて各地に建設してきたインフラが、各国の貧困削減に大きな効果を持ったことは歴然としています。そうした日本流のODAの効果を、正しくメッセージ化して発信すべきだと私はつねづね考えています。

諏訪 それは、これまでやってきた援助を再評価するという意味でしょうか。

渡辺 再評価というより、「再編集」というのはどうでしょうか。そのときどきの世界の援助潮流に流されることなく、これまでの日本の援助について自己反省しつつ、その成果を論理化していく知的作業ですね。これを「再編集」と私は言いたいわけです。JICEの皆さんも、これまでの人づくり協力のやり方を否定するのではなく、これまでの援助の成果を「再編集」しながら前に進むことが必要なのではないでしょうか。

諏訪 私どもも30年の貴重な経験を活かすためにも、ぜひ心得たいと思います。

● JICEに対するもう一つの期待

諏訪 これまで、開発途上国を対象にした国際協力を

みてきました。視点を変えて、日本は、少子高齢化社会などで将来的に労働力が不足していきます。ODAに対する土壌もまだ成熟しているとは言い難い、そんななかで、外国からの労働人材が入ってくることになります。

渡辺 少子高齢化による労働力の減少にともない、外国人材の活用の必要性があることは事実です。しかし、日本は異質性を認めながらない同質的な社会ですから、よほど注意深い受入政策の裏づけがないと危ういですよね。外国人を秩序正しく受け入れることがますます必要となっていくだろうと思います。日本人と外国人が同一労働・同一賃金で働くことを基本原則として守らなければいけません。受入に関する法制度や労働環境、労働条件をあらためて検討する必要があります。優秀な人材を集めなければなりません。アジアの労働力を有効に活かし、帰国後、彼らがアジアの国々でリーダーとして、中堅的な労働力として自国の発展に貢献できるような循環をつくり出す努力が重要でしょうね。

諏訪 いずれ来るアジアの労働力導入に、JICEの役割はどうあるべきだと思いますか。

渡辺 研修員受入事業や外国出身の研修監理員の雇用など、今までの実績を活かして、「温かく、かつ秩序正しい迎え入れならびに帰国」のひな型をつくってほしいと思います。これが一つのモデルとして仕上がれば、大きなインパクトになるのではないのでしょうか。設立30周年を迎えたこの機会に、ぜひ、日本を変える新しいモデルをつくってほしい。

諏訪 本日は、貴重なご意見をありがとうございました。